

第4回森林再生実行会議 議事録（全文）

令和3年12月26日（日）13:30～15:30
あがたの森 2-8 会議室

（事務局）

定刻となりましたので只今から、第4回松本市森林再生実行会議を開会いたします。本日の会議は、Youtube 松本市公式チャンネルで配信しております。

会議の終了は概ね、午後3時30分を予定しております。

それではここからは、香山座長に進行をお願いいたします。

（香山座長）

それでは、第4回の会議ということで、進めていきたいと思えます。

今日の全体の流れを言いますと、いよいよ報告書というのをこの実行会議で作成していくわけですが、どんな報告書にするのかということ。

その中から来年度に向けての課題というのが同時に出てくると思えますので、その辺のことを議論していきたい。

最後に残った時間で、今年の実行会議の最終回になる第5回をどんな形にしていくのか、その辺の話が出来ればと思っています。

報告書の在り方ですが、最初の時に、この会議の議事録という形は出ていますけれど、最終的に報告書的なものを作っていこう。こういうことをやりましたということが分かって、それを基に来年度以降に繋がっていくものそういう文書を作ろうということは決めているわけですが、それをどんな形のものにしていくかっていうのが、今日の主な課題です。

報告書の在り方について既に、委員の中で若干の議論を進めてきていることがありますので、とりあえず、どんな章立てだったらいいのかなという、そういう叩き台が今出ていますので、それをちょっと画面に出していただけますか。

結局どういう内容かってことを、改めて確認しながら、その中身、形としては、報告書というのは一種のドキュメントですが、まず既に提言が出ていますので、提言のやり直しでは意味がないわけです。かといって提言と繋がらなくても意味がないということで、そういう形から、報告書というものはあるだろうということです。

そこで、どんなものにするか。

いわゆる章立てですが、これは昨年度の提言書に対応したものにしたい方がいいんじゃないかと考えます。

これは昨年度の提言と、これから提言を実行していくということの連続性をしっかり確保する必要があるので、章立てとしては昨年度の提言書に対応したものにしたら良いだろう。

一方で文書としてのスタイルですが、基本的には提言をそのまま引き写して、一つ一つの提言の項目をこうやりますということでは、現実的に実効的なものにはならないので、この提言の中からどこを重点的に取り上げるのかという重み付けをしていく。

プラス、実行のための会議からの報告書ですから、その内容を実際にどういうふうにや
っていくのかという工程表、ロードマップ、そういうものがなきゃいけないのではない
か、というふうに考えています。

その中で、既にいくつかのロードマップ案というのを、議論、やり取りをしているところ
ですけれども、一応章立て的に書いていくと、松枯れ対策のこと、森林利活用、森林の
取り扱いと環境対策、人材と組織でさらに継続する課題っていう、そういうことがあった
わけですが、その中からどこを重点に、その中でモデル的なロードマップというものを示
していければいいのかなと考えているところです。

昨年度の提言の中で非常に重点としてボリュームが多かったのは、松枯れ対策ですが、
これについては元々昨年度からの松本市の森林再生ということの一つのきっかけになった
のが松枯れだったということで、去年の提言の中では非常に多くのボリュームを割いて、
提言というよりは松枯れの事実的な認識ですね。そういう部分、かなりのボリュームがあ
ったわけです。

ただ、その中で、具体的にどういうことをやるということが、既にかなり具体的に示
されていて、これは今年度というより来年度からさらに具体的に進んでいくことだと思
いますけれども、そういうことについて改めて繰り返しここで書く部分は、そんなにないだ
ろうと。

むしろこれからということで、どういうことをやったらいいのかって、それが中心にな
るんだろうと、まず考えられる。

その中で、ではこれからというところで、どこに一番重点を置いたらいいかなと。それ
ぞれ全部、非常に重要なことではあるんですが、直ちに動かなければならないというふう
に言えるのは、それぞれの取り組みの中でも、章の番号で言うと第4章の人材と組織、そ
の中で政策作りのプロセスということ。その中で、松本市森林再生市民会議というのを作
ろうという提言がなされていました。

実際、今年の実行会議が来年度以降どうなるかは決まっていますが、来年からは、こ
の市民会議というものがスタートしなければいけないだろう。

従って、今年我々の一番の会議の中の大きな課題は、市民会議のあり方について議論
することではないかなと思います。

前回の会議の後、この4人で議論というか文書のやりとりをしている中で、市民会議っ
てどうやったらいいのかなっていうことについて、小山さんが少しまとめていただいで
るので、小山さんから少しお話をさせていただきますか。

(小山)

実際ですね市民会議というものをずっと議論していく中で、どういった市民会議を作
っていけばいいのかという話をしていくと、いくつかキーワードがあるのかなと。当然そ
ういう政策作りに関して言えば、皆さんがそれに参加するってことが重要になってくるであ
ろう。

実際にそういったものに参加するといいますが、現実的に市民の方というのはあまり
森林に関心が無かったり、興味も無い。

そうすると、参加しても具体的にどうしていいのかわからないということになってしま

うのではないかと思っ、一般的にこういった活動において参加するという行動が行われる前には、ご自身が一定の知識を持っている、理解をしているということが大事であろうと。

理解をして自分はどう行動すべきかが分かって、初めて意見が言えるのではないかなというステップになるかと思います。

ところが、現実にはそれに至る前の興味もないよということになってまいりますと、いくつかのステップを踏まないと、とてもじゃないけど森林市民会議で発言をするということができない。

これが場合によっては、誰かの意見に良いとも悪いとも分からないのでスルーしてしまう。

ただ参加してしまうだけになってしまふのかなということ、参加するにあたっては、当然一定の知識と技能という言い方なのか、いろんな人の話を自分で分析できる能力が必要であろう。

もう一方では、森林に対して興味を持っていただくという二軸が必要なのではないかということで、単に市民会議を開きますだけではなくて、市民会議に参加できる方々をいっばい増やしましょうということが、きっと必要になってくるだろう。

そこには、興味を持っていただくという意味でのステージの皆さんもいらっしゃいますし、もっと正しい知識を得ていこう、こういったものにつきまして、今年度の山ゼミのような形で少しソマチチさんを中心にやっている部分はあるかと思いますが、これの拡充というのは必要であろう。

その上で、こういうことだったらこう考えられるのかなっていうことをご自身で考えられるような、もう一つ違う形の学びの場もいるのかな、こういったいくつかの学びの場を合わせながら、それによって得られたものをご自身の意見でやっていただく市民会議というストーリーになるのではないか。

そういう意味でいくと、明日からさあ市民会議ですと言ってお声がけをするというような市民会議をきちんと運営していく、先行することはある程度仕方がない部分もあるでしょうけれども、将来的には市民会議をきちんと動かしていくための市民会議に向けたシステムというのもし少しご提案しないと仕方がないのかなっていうことで少し、私の方でこの下の部分を考えさせていただいて皆さんにご意見を伺っているところです。

(香山)

そういう点では、いきなり市民会議ではなくて、まず市民会議の土台作りという、そもそも、会議自体が決まったことを承認する会議ではなくて、政策を作っていこうということですから、いろんな意味で仮にですね、高度な専門家が集まったとしても、この会議でどうやっていこうかなっていうこと自体が会議の主な議題になってくるのかなという気もするんですが、政策作りっていう全体の枠組みの中での市民会議の位置付け、どういう役割があるのかなっていうその辺について、少しまとめていくというか、今の段階でどんな枠組みかなっていうのを示しておいた方がいいかという気もするんですが、取りまとめて示すのが専門である三木さん、その辺の政策の中での市民会議の位置付けというのを、場合によって後ろのホワイトボードを使っさせていただいてもいいので、少しお話しいただけますか。

(三木)

先程もちょっとホワイトボードで、いろいろ書いて議論をしたけれども、森林再生市民会議が、何に関係しているのかが、まだ分からないところがありますので、整理しておく必要があるかなと思います。

もちろん市民会議ということですから、市民の方がいらっしゃるわけですね。

松本市民というのは、住民票を置いている人だとちょっと狭いので、また後で範囲を考えなきゃいけませんけど、その松本市民が集まっているいろいろな言うので、森林再生市民会議っていうのがある。これが何を作っていくのか、提言にはなんと書いてあったんでしたっけね。

(小山)

「長期ビジョンを策定するための合意形成の仕組み」、という書き方をしていましたね。だからマスタープランを作っていくための合意形成ということになるのかなと思います。

(三木)

森林再生市民会議は長期ビジョンを決めていく、合意形成をしていくってことですね。

この長期ビジョンが、マスタープランが、他の何かと関わるかがまだよく分かってないわけですね。

例えば森林政策の中心的なところでは、松本市森林整備計画が森林法の中では一番大きな計画だろうと思いますし、その他にももちろん松枯れ対策の基本的な計画とかもあるでしょうし、あと松本市がお持ちかどうか私存じ上げないですけど、例えばこの間までの公共建築物等木材利用促進法の中での公共建築物木材利用指針みたいなものが、例えば仮にあったとしたら、そういうふうなものも松本市全体の森林・林業の姿を決めていく大きな計画だろうと思うんです。

このように何に関係するか挙げていかないと、森林再生市民会議が合意形成して長期ビジョンを考えるけれども、それが何に反映されるのかが分からない。それだと市民会議をやる意味が市民には良く分からなくなってくると思いますので、その辺を整理しないといけないなと思います。

(香山)

何をやるのかって、この長期ビジョンが具体的に関連しているのは、去年の提言の各項目というのが入ってくるかと思うのですけれども、提言の各項目、今画面に出している章立てっていうのがまさに、その去年の提言のそのままをただ書き写して行って、それに加えて今、三木委員の方から話があった、市町村森林整備計画であるとか、公共施設の木材利用の指針とか、そういうものも更に付随して出てくるかと思うんです。

去年の提言の中では具体的なそういう森林法に基づいた政策とか、政策的に既に決まっていることではなくて、もう少し大きな枠組み的な言葉でしか書かれていないんです。

その辺も含めて、最低限その枠組みは使うとして、さらに具体的なところまで市民会議が課題として突っ込んでいくのか、それともとりあえず市民会議っていうレベルとしては

去年の枠組みの、去年の章立てというのを改めておさらいしてマスタープラン化していくのか、その辺はどちらの方が分かりやすいというか入り口としては良いんでしょうね。

(小山)

前回の会議のときに、市でやられているいくつかの会議の中でどういうものがあるかというのが話題になったかと思うんですけども、その中で地区の松くい虫対策協議会のようなところで、例えば今回のきっかけになった松くい虫の問題というのは反映されていると。

逆にそこに市民の意見が多いということがあったかと思えます。

そうしていきますと、ここで決めていくマスタープランと例えば地区の松くい虫の対策協議会が、あまり離れているというのはよろしくない。

せっかく今回、地区の松くい虫対策協議会は、多分今回の再生会議以前の提言の中に、そのきっかけになったのはこういうものではないでしょうか。

これとこれが分断されているというのは、よくないのではないかと。

だとすると、この長期ビジョンとこれとは何かの一定の関係性はあるべきではないのかなと。

どっちが矢印ということではないんですけどもっていうふうに考えていくと、こういうものも、例えば先程、三木さんが言われていた市の森林整備計画で、渡辺さんがよく「じゃあどうやって自分たちが使えばいいのよ」って話になってくると木材の利用計画だとか、これと全く離れた形でこれはこれ、それはそれというのはあまりいい形ではないのかな。

せっかくこれができていけばこっち側が動いていくと、市民が参加して市町村の仕組みが動いていくというスタイルになるのではないかと思うので、この話がすごく今回大きかったように、他も大きくなっていくためにはこことこっちは繋げざるを得ないかなっていう気はしますけれども。

(香山)

市民としてどう参加するかっていう話ですけども渡辺さんどうですか。今の繋がり方について。

(渡辺)

市民の関わり方っていう点では、当然、小山さんがお話ししていた理屈があって、一つは興味を持っていただくっていう部分の入りの部分の市民の方もいらっしゃるし、松本市民や松本市に関わる方々がもっと切り込んだお話、例えば作りの部分について具体的にどうするかっていうお話とかも二極化になると思うんですけども、私もまだ松本市民になって、3年くらいしか経ってないところで、松本に来てから、森林のこととか、問題を知った部分があるので、まずはその知ってもらうっていう部分をどうしていくかが大切かなって思います。

(香山)

そうですね、政策提言以前にね。

となると、この上のホワイトボードの上半分のところ、まず知っていく場を作るというのも市民会議の役割ってことになるんですかね。

市民会議は、長期ビジョン、マスタープランをつくると言いながらもまず、そもそも市民会議をやる土台である知る場を作る。という、そういう役割ってことですね。

いろんな形でその知るその場を作る、場作りというのは、それこそ小山さんの専門として林業総合センターでやっておられると思うんですが、松本市のこの文脈の中ではどんなやり方のイメージがありますか。

(小山)

まさに松本市の三ガク都というのが一番ここに近いのではないかと考えております。現在私自身がそういった知る場を作るということでやらせていただいている講習の中では、特にこちらで言うと学びの部分、学びの場というのは現在建て替えをしている博物館が一つあると思いますし、森林関係で言えばアルプス公園の博物館が学びに該当すると思います。

もう一方で意外とうまく使われていないのは図書館という組織ではなかろうか。こちらにもいろんな情報の宝庫ですから、学びの場である。

松本市に関しては、公民館活動がかなり盛んですので、これが現状では公民館、博物館、図書館、もしかしたら美術館も含めて、そういったものがすべてバラバラ個別に動いているものが、どこかで森林という横軸でくっ付いていくとそれが知る場という総合的なものにならないかな。

非常に組織的に難しいところがあるのは私自身も役所の人間としては思うんですけども、うまくその連携が取れていくと、いろんなところで知る場という機会が増えていくきっかけにはなるのかな。そこまでの箱は物凄く、松本というところは、しっかりされているんじゃないかと思えます。

(渡辺)

先程小山さんが仰っていたことは、私も同感で、松本市内でも、良いものが沢山あるんですよ。

例えば、美術館も多いですし、ギターの生産も日本一ですかね。

木に関わる産業もありますし、クラフトフェアもあったり、いろいろ良いものがすごくたくさんあるのですが、それが個々になっていて、もうちょっとうまく連携といいますか、うまく繋がれたらもっと知る場も増えますし、いいものが、より関係性が深まるんじゃないかなと感じます。

(香山)

その知る場というか実際にはそれぞれの場面で専門的に活動されている個人や組織があって、もちろん林業もあるわけですよ。

それがバラバラであると、それについて専門家でない人も含めて学んでいくっていうそういう共通の何か場所があって、おそらく市民会議はそこを担う、その繋ぎ役っていうんですかね、そういうことができれば非常に面白いのではないかなっていう、私もそういうふうを感じているところです。

公民館、いわゆる社会教育的な活動ということでは、今年度からですけれども、まだトライアルですが、信州山岳フォーラム、松本でやっている山岳フォーラムの一環として、山ゼミっていうのは今年から新しく企画されていて、山ゼミも元々が山岳フォーラムなんで、登山系のところから始まっています。

その山ゼミの中のまた1コースとして、里山とか林業とかそっちに近い講座というのを、今ちょうど私が関わっているソマミチで運営しているところで、過去2回開催しています。あと2回やるんですけど、これはもう本当に市民参加のオープン型で、ただ指導する側は、プロがやるとそういう形でこれがどんな講座としてやっていけば継続的に市民が森林に関わっていく、あるいは市民と森林のプロが交流していくっていう、どんな形でやったらいいのかなと、まだトライアルで初めてやってみたレベルですけども、そんなことも松本の森林作りにちゃんと繋げていきたいと思います。それが今後できる市民会議、森林再生市民会議ですから。

ただ、市民が集まって話をするのではなくて、まさにその森林再生のためのマスタープランを作ろうという、ある意味しっかりした土台作りになっていけるのかなって気は非常にしています。

とにかく森林のことって、今回ちょっとそれぞれの立場で市民の意識調査をしてもわかったことですけど、あまりにも日常から遠い。

たまたまここにいる人はこういう立場で委員として選ばれていますから普段からそれなりに森林への関心を持って木材の関心を持っていたわけですが、実際松本市のほとんどの人から森林ってすごく遠いんだなってことを改めて確認したわけですよ。

そういう意味で、どうやってそれを繋げていくのかっていう、その動かし方でそれがなければ市民会議なんてものを作ったとして、結局のところは、じゃあどうするのって言って誰かやっぱり詳しい人が原因を言って、それについて「あ、そうですか」って、「じゃあそういうふうにするのがいいんでしょうね」、みたいなそんなことにしかならない。

それでは、やはり今までと同じになってしまうし、それを動かしていく力っていうのは、やはり参加する市民がいかにかあるいは、今まで詳しくあったプロがどういうふうにしてそこを市民に開いていくかってそういう繋がりっていうことですね。

一生懸命メモを書いておられる三木さんですが、なんとなく少しまとまった感じがあれば。

(三木)

まとまった感じはあるんですけど、なかなか難しいなと思うのが、森林を市民の日常に近づけていくってことが、森林再生の要であると思うんです。

山が緑色になったではそれは森林再生とは言わなくて、やっぱり松本市民と松本の森林が結びつき、日常の中に近づいてきて、まさに3ガク都ですか三つのガクの中の一つだというところで市民の中に根付くっていうのが本当の意味の森林再生だと思うんです。

この知る場を作るのには、市民がまだ十分な興味や知識を持っていない段階で、それをかん養するための場を作らなきゃいけないけど、それは一体誰が考えるんだっていう問題がある。最初は市民自身が考えることは十分にはできないので、それをどうやってプロモートしていくのか、最初のエンジンの始動をどう回すのかっていうのはちょっと考えなきゃいけない。それが我々の実行会議のこれからの課題なのかもしれないというふうには思

っています。

ここを作るのは結構難しくて、結局私達がこういうことを市民は学ぶべきだっていうふうになっちゃうと、非常につまらないものになってしまうので、そこは難しいなと思っています。

(香山)

そうですね、その情報格差というかね、それが非常にある中で、これだけのことがあるんだから「このぐらいは知っていたいよね」ってそこの立ち位置から始まると、教養として面白い人はいるかもしれないけれども、それが具体的な活動には、なかなかならないかもしれない。

そうしたらこういうことを学びたいって気持ちを起こさせる何かっていうそういうレベルからになってくると思うんですけど、一番近い入り口ってどの辺から出てくるんでしょうね。

(小山)

実際、知る場ってすごく簡単なんですけれども、今回そこの市民会議のロードマップってところで、一番私が気にしていたのが「知る」の前だろうと。これはいろいろその環境問題とかを議論していたときからずっとあったんですけども、知るの前に少なくともその下のステージにそもそも興味を持ってもらうっていうステージがあるよねって話がずっと出てきています。

どういう統計処理なのかをいまだに私も理解できてないんですけども、一般的にいろんな物事をやっていくと、3分の2は興味のない人で構成されていて、1割から2割は知りたい人がいて、実際に参加する人は1%以下だよなんていう話をよく聞くんですね。

そうすると、現在の松本市民と実際にこういう話をする中で、興味を持っている人が少ないなと思ったのは、この森林の問題ですので、そう考えていくと、先程三木さんが言われたのは、この人たちに教えても変な話ですが、「こっちがそれだけは知るべきだ」、みたいな話になってしまうっていうことではないとすると、もう一つ下の興味っていうことになるのかなと。

だから知っていただいて、知る場を作るところは山岳フォーラムの中で香山さんたちが一生懸命展開されている。

これはこれで必要ですし、それは市民会議として動くことなんだけれども、ここに来てもらう人たちをどう増やせばいいんだろう。

その辺は少し逆に言うと今回の渡辺さんがいくつかチャレンジされているのかなと思いますし、私自身もどうやって興味を持ってもらえばいいのか、世間的にこれは学校でやればいいよっていう話になってしまっただけで学校教育に持っていきこうって話になるんですけども多分それではないんじゃないかな。

それも大事かもしれないけど、それ以外にもっと自発的に面白そうって思えるっていうのがあるんじゃないのかな。

その辺を渡辺さんが少しチャレンジして、若干本人は挫折したって感があるのかもしれないですけど、その辺のチャレンジの話を少し入れていただくと、ここのことも考えられるのかなと思うんですけど、渡辺さんいかがですか。

(渡辺)

知る場といい、興味を持っていただくっていう部分で、最初の方で松本市内の飲食店を巡って森林のことだったり、木に興味ありますかっていうヒアリングベースで聞いていく中で、私が回った飲食店がいくつかあるんですけども、森林っていう切り口ではあんまりピンとは来ていないけど、木が好きだから古材をカウンターにつけてみましたっていう方だったり、あとは経木と言って、昔おにぎりとか包んでいたような木の薄い紙のようなものがあるんですけど、これを飲食店のお皿の上に敷いたりしている。

でも店員さんに聞くと、いやこれ何の木かわからない、どっかで仕入れているけど使っているよ、みたいなどころで、身近にはあるけど自分ごととしては、まだ繋がりきれていないっていう部分もある方もいらっしゃる。

もっと松本っていい木がたくさんあるようだとか、松本市内でも木に関わる人がたくさんいらっしゃるの、そういった人たちを繋げられれば、うちって経木使っているからもっと知りたいなって思ってくれる人もいらっしゃるかもしれないし、自分が通っていた飲食店が経木を使っている、これってどこで売っているんですかとか、会話で木のことが生まれるような感じで、少しずつ増えていったらいいなって思います。

(香山)

多分その経木、アカマツだと思うんですね。

アカマツは本当にたくさんあって、昔、日本中でそうやって経木を作っていたんですけど本当にもう廃れて絶滅に瀕したところで今、そこからまた立ち上がって、多分その経木は伊那で作っているんじゃないですか。

だから松本じゃないんですね、でもその最後にその経木を作る道具を持って作っておられたのは信州新町にあって、松本を飛ばして伊那に行っちゃったっていう感じがあって、でもこのアカマツの使い方として本当に生活に密着したところにあったものです。そういうことにもう1回気がついていくってことは、興味の一つの出発点になるかなと思います。

我々の生活の中に森林というのは、昔はすごく近かったけど本当に遠くなっちゃったので、そのどこを入りにしたらいいのかってことの課題が本当にいっぱいある気がします。

私、今年山ゼミの講座を企画していますが、どうしてもプロというか、事業者側の視点になるので、マーケティング用語で言うといわゆるプロダクトアウトですね。これだけのものをこんなに面白いものがあるから面白いと思いますよね、みたいな。

たまに、確かに面白いですねって言われることもあるんですけど、でもやはりその講座そのものに来ていただくのが難しいっていうのが課題で。ここで宣伝するわけにいかないんですが、1月と3月にまだあります。少しでも多くの方に来ていただきたいなと思いつつ、後で検索してください。山ゼミ。

やっぱり、中身は面白いかもしれないけど、まず来ていただけないと。

そういう点で言うと、これを無理やり森林再生市民会議の方に持っていけば、一つのスタイルとしておそらく専門家的な人たちも委員としてお願いするってことになるだろうけど、それ以外に公募委員というような形をとるかもしれない。そのときに応募しますって

手を挙げてくれる市民は誰なのかなって、今考えるとやっぱりものすごく少ない。

手を挙げそうな人を逆にこっちから指名するぐらいのレベルになっちゃうと、それでは本当に動くものにはなっていないので、その興味の地盤作りっていうんですかね。それはすごく大事だなって。

今年度この実行会議がどこまでそれを動かすことができるかってことでいろんな試みをしていて、例えばYoutubeで中継したりとか、Facebookのページ作ったりとか、会場も今日ようやく市役所から街中に降りてきたところですけど、もっともっと街中に近いところでやらなきゃいけないのかなって本当に思っていて、それがどんなふうに来年以降の中で実現していけるのか、もしも市民会議というものが立ち上がっていくならそういう雰囲気の中で、ぜひやっていきたいというふうに思いますね。

この市民会議の部分、もうちょっと話を続けたいと思います。というのは、おそらく今の感じで言うところの報告書の中でかなりのボリュームがここに割かれるだろうっていう気がしているので、市民会議は今のような、興味を作るところから始まって知る場を作るといった活動も市民会議なのか。それとも、それは別の仕掛けが、その回していくエンジンが必要だっていうふうに三木さんおっしゃっていたんですけど、その辺はどういうふうに組み立てたらいいですかね。

(小山)

多分三木さんが言われたように、これエンジンなので別にあった方がいいよねっていうのはそうなんですけど、できればここでやったらいいと思うんですよね。

じゃあすぐにできるかっていうと多分できないので、エンジンなんですけれども、もしかすると点火装置だけ誰かが、作んなきゃいけないんじゃないかな。だからエンジンはやっぱり市民会議で、ここは考えていくべきでしょうっていうのはすごく大事だと思います。

もしかすると、もう一つ後で話題になるかもしれないが、別のことも考えなきゃ。何かを知る場を作るってこともこのエンジンで考えなきゃいけないと思うんですけど、少なくとも今興味も何もない、知る場もほとんどない中で、エンジンを与えても点火装置がなければ動けないので、点火装置の分だけは何か一生懸命考えないといけないのか。もしかすると言い出しっぺのこの辺(注：実行会議委員)が責任を持たざるを得ないのかなっていうのは思いますけれども、市民会議でやることとしてこれらを、もうこっちのマスタープランを作っていくために、常にそういう人たちを集めていくっていう作業もどっかで考えていく。自分たちだけでというのではないためにも、っていう意味ではこっちも少し意識した方がいいかなという気はいたします。

(香山)

点火装置ですね。だんだん細かい話になってくるんですが、エンジンは作るけど、おそらく燃料はあるんですよね。

要するに、これだけの森林があって市民がいて、潜在的なニーズがある。でも点火するって、どうやったら点火できるのか。

黙っていて興味のある人っていうだけではないんで、何かそこに点火していく仕掛けが必要で、それは市民会議そのものが担うのか、あるいは市民会議の一部にそういうのも組み込んでおくのか、あるいは今やっているこの実行会議のようなものが継続してそこだ

けを担うのか、その辺どうでしょうね。いろいろ悩ましいところではあるんですが。

(三木)

それはもちろん森林再生市民会議自身がやっていく必要があるかと思えます。

そうすると、この市民会議を構成するのは誰なんだ、どのように構成するのかっていうところが、この森林再生実行会議の中で考えていかないといけないかなというふうに思いますね。それをうまく組めれば、実行していくことができるんじゃないかと思えます。

ちょっと具体的にはまだ考えがないですけど。

(香山)

今日の会議だけで、できるわけではないんですが、課題をはっきり出していくということをしなければいけないのですが、そうは言ってもこの報告の中には、「一応来年度からはこれでいきます」よというところまで書き込んでいかなきゃいけないんですが、もう一つその市民会議のアウトプットの方法を整理してみましようか。

去年の提言に載っていた項目というのは当然入ってきますね。

それ以外に、三木さんから話があった、法律で決まっている部分としての市町村整備計画とか、あるいは松本にどの程度、森林に直接関わる条例とか指針があるのか、私も把握してないですが。それに関わることであるとか、それ以外に何かアウトプットとして、そのマスタープランの言ってみれば中身ですけど、そういうもの考えられますか。

例えば、マスタープランがあってもなくても市町村森林整備計画があるわけですよ。

現実問題としては、松本市の森林整備計画って、もちろんずっと作られていますけど、松本市が独自の発想で松本市のここにいる方々がいろいろ考えて作るというよりは、そもそも今まであったものがあるし、もうちょっと広い意味で言って流域計画というのがあって、流域計画の中での市町村計画っていうね、本当はボトムアップのはずですけど、現実には日本中のほとんどの市町村の森林整備計画というのは、流域計画の中でその一部を担うみたいな、作られ方をしている、ほぼ県が主導しているっていうんですかね、それが現実じゃないですか。

それに対して、一応制度上はこんな形で作りましてよって公告出して。大町市の場合で言うと、それについて検討する組織はないんですけど、ただできましたと公告されるだけ。それに対して誰も普通は意見を言わないので、そのまま出来上がっていくってそんなふうになっていますけれども。そんな部分について少し市民会議がコミットしていく可能性っていうのは考えられますか。

(小山)

私自身、いくつかそういう会議に、松本市ではないですが、県内外の会議に出させていただいたことがあります。そういうことをやろうとしている市町村さんがいらっしゃるということは間違いありません。

それが現在の市町村森林整備計画を変えるということではなくて、市町村のマスタープランをきちんと定めて、それを具体的に実行させましようという動きは、以前に三木さんのほうからご紹介いただいた柿澤先生の本でもそういうケーススタディが出ていると思うんですね。

それができるところまで市町村でやれるとすればマスタープランになってくるので、それを例えば市町村の計画に落としとしていくと、市町村の計画と流域の計画が合わなければ流域の計画がおかしいだろうと言っていくっていくのも、本来は市町村の役目ではないのかなと。特に小さな市町村であれば、そこまでの権限がって言われるかもしれませんが、やはり中核市になっているところというのは、それだけきちんと意見を言うべきではないかなというふうには思います。

そういった意味でいけば、県内でも2大中核市になっている松本市からそういう長期ビジョンを立てたので、これに基づいて私達の森林はこうしていきますよっていうのを流域計画の中に入れていく。で、流域計画と市の計画とは年限が違うかもしれませんが、次の計画までにはこういうところを意識してくださいっていうふうに協議していくことで、流域への波及というのがいけるのではないかな。

そんなふうに思いますので、変えたからすぐに明日から変えろではないと思いますけれども、自分たちの計画をより具体的にしていく意味で、市町村から出していくっていうのは、国の流れとしてもいい方向ではないかと思えます。

(香山)

実際マスタープランそのものを、市民会議で作るわけではないんです。市民会議から何かしら提言を受けて、そのマスタープランの中の一つの項目として市町村森林整備計画というのがあり、それは言ってみれば行政の法律で決まった手続き的なものでもあるので、これはもちろん役所の方で作っていくということだとは思いますが、そこに入りきらないものがいっぱい出てくるわけです。

実際に言えば、市町村森林整備計画って名前は森林整備計画ですけど、実際は伐採の量についての数値的な計画がほとんどで、法律はそこまでしか決まっていなくて、でも実際にはどんな森林を作ったらいのかってのは別の話として、公のものがいろいろありますね。

長野県の例でいうと森林づくり条例というのがあって、さらに森林づくり指針とあって、ガイドラインがあるんですけど、これと市町村森林整備計画というのはほとんどリンクしてないですね。

これも不思議なことですけど、長野県の行政に限ったことではないですけど、県と市町村の連携というのが非常に悪いって言い方をしちゃいけないが、それぞれ各自だっただけの方がいいと思うんですけど、あんまり連携がない。

私、長野県の森林づくり条例とか、10年に1回更新される指針(長野県森林づくり指針)について委員として関わってまして、そういうものを作っていくと、じゃあどこに繋がるのかなっていうと市町村を飛び越して、事業者には実は繋がってます。これも変なんですけど事業者にとっての、どんな補助金が来るのかっていうそっちの話、またいきなりいっちゃうんですけどね。

どんな森林を作りたいのかなという話とはずれますが、でもそういういろんなレベルでの公のものがあって、それがいわゆる事業者レベルの中ではそれなりに流通していますけれども、市民には全く届かないですね。

どんな森林が出来るかっていうことのディスパワー、一つ大きな根拠とかそれに基づいて予算が配分され、そういうところまで繋がっていくものなので、そこがなかなか繋

がらない。

それを実際作るのはもちろん行政の専門職の仕事ではあるけど、それに市民が影響を与えていくっていう、その辺のところは市民会議の役割としてあれば、市民会議が何を作るのかってまだまだよく分からないところあるけれども、少なくとも決まっている今作られていく動きに影響を与えられる、そういうものになったらいい気はしますね。

ここへ（ホワイトボード）書き出してみますか。

（三木）

あと何がありますかね。市で長期ビジョンと関連付けた方がいいものっていうのは、どういふものがありますかね。

市の森林の姿とか、それから市民が森林を利用する在り方とかを決めているような計画なり、指針なりがあるとわかりやすいですけど。

（小山）

ちょっと逆にこれ市の方にお聞きしたいのですが。もしかすると先ほど三木さんが言われた利用の方ですと別の課かもしれませんけれども、松本市で木造を使うということでの何らかの計画ってございますか？あれば教えていただきたいのですが。

木材利用に関するような計画。（材を）出すということではなくて、使う方になるかと思えますけど。

（事務局）

木材を利用する計画でございますが、今のところ無いといえますか、建物の具体的な施設に提供するっていうことは今のところないのですが、木材利用に関する方針を作っており、目標としては掲げています。

（香山）

つまり公共施設木質化の関係ですね。これは一般的に市民に知られる形になっていませんか？

（事務局）

ホームページでは方針という形で載せています。

具体的には、過去に児童センターとかそういったところの公共施設に使うような形で行っています。今後も進めていく予定にはなっておりますが、まだ具体的な施設への計画はないです。

（香山）

そういうものがあるということをも市民に繋ぎ、さらに市民の意見を反映させていく、そういうチャンネル作りっていうのは、今後必要な可能性があることになっていきますね。

（小山）

できるかもしれないってことですね。現状であるということが一つ出てくる。

(三木)

公共建築物等木材利用促進法は、今年法律が改正されて「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」に名前も変わって、法律の範囲が公共建築物以外の民間の建築物もなるべく木質化していきましょうということになった。

それは、木で建てるとか、木の板を使うだけじゃなくて例えばその中に、チップボイラーとかですね、その木質バイオマス燃料なんかを使っていくとか含まれます。

そのあたりをやっけていこうとなってきたので、ますますこういうのがその松本市の全体の姿を決めていく、重要なシーンにはなっていくと思うので、これからそこに市民が意見を反映させていくっていうことは必要な価値があるのかなと思いますね。

(香山)

これは、いきなりはいかなくて長い時間をかけて市民が勉強会をやり、そういうことの成果として、できるっていうタイプのものだと思うのですが。それこそこれも三木さんの専門分野。この間、本にもいくつか事例で紹介されていましたが、市町村ごとの地域の森林の在り方のビジョンを描いていく。そういうのがあるじゃないですか。松本はあんまりそれをやってないですよ。

例えば隣の安曇野市では、里山再生プランというものをこれもすごく長い時間かけた議論の末の一つのものとして作り上げて、そのプランを実現するために、さらに市民が参加する勉強会っていうのをずっと続けていて、それが一つのきっかけになって、いくつかの市民活動ができていく。

それに事業者も影響されて具体的に私の関わっている山仕事創造舎とか、森林組合とかってそういう事業者が、安曇野市のそういう森林づくりの計画の中で、安曇野市有林を利用するということになって、その伐採の発注がくると、切り出したものが実際に公共施設に使われるという非常に見えやすい循環まで行っているのがすぐ隣にありますから、そういうような全体をぐるっと回る循環というのが作れていたら。それを市民会議の方から一つイメージを出していく。

結局それを具体的な政策にしていくというのは本当にもう専門的な仕事になりますけど、でも、そもそもイメージがないとやっぱり前に動かないのだろうなと思うのですよね。

(三木)

1週間くらい前の新聞の中で、あれはどこでしたっけ、

「何とかやるじゃん会」(注：こんな山辺にするじゃん会)。入山辺の方々がその地域をどうしていくのかっていうことを、森林に限らずいろいろな地域おこしのことで、プランを立てられた。そういう中には、森林っていうのは入っているのですよね。

森林のことに特化して、地域で計画を立ててくださいとかビジョンを立ててくださいっていうと、それは多分、良いアイデアが出てこないと思うのですが。

一方で、松本市のそれぞれの地域のところでうちの地域をどうしていこうかって考えると、その中には必ず森林は入っているっていうところが面白いところで、そういう中か

ら、市民会議との繋がり、あるいは参加してくださる方々っていうのを作っていくっていうのも面白いかなと思います。

(香山)

県産材利用のマッチングツアーなんてものがありましたよね、最近。あれもフィールドは松本だったのではないですかね。

結構、いろんなものが事業者側でも動いているし行政でも動いている。それぞれのものもあって、あとそれを市民がどうコミットできるかっていうそんなことかなと思うのですけど。

渡辺さんから見て今いくつか具体的なものが挙がってきていますが、情報があつたものとか、アクセスできそうな感じのものとかってありますか？

(渡辺)

松本市内というと、松本市に来て、松くいの話も初めて聞きました。先ほどおっしゃっていた木質の利用化の部分について、松本市のホームページでは掲げられていたようなので、先ほどネットで見て正直初めて聞いた、知った部分になりますね。

長野県ではないのですが、以前栃木県にいたことがありまして、そこでは地産地消の家作りや、あとは以前松本市でも行われていたみたいなのですが、その県産材を利用した小学校とか中学校とか学校教育の机やその椅子などに利用されて、身近にあるものとして木を取り入れている活動とかも栃木県で感じていました。松本でも以前、実施されていたということをちょっと耳にしたことがありました。

(香山)

地産地消の家作りみたいなことを掲げている工務店さんって、結構各地にありますね。いわゆる工務店というだけでなくそれが製材業や、あるいは場合によっては林業にまで関わって一つの会社で一貫的なことをする。そういう企業もあります。

今、調べ直したら県産材利用マッチングツアーは長野県林務部の企画だったのですね。業者向けの企画ですね。会場として県内3地区の中に松本市も入っていたと、そういうものだったのですね。だからそこに繋がっている。言ってみれば、いずれにしてもビジネス側のことで、県としてそれをサポートするものです。

それに対して、市民がどう繋がってくるのかっていうのはなかなか見えない段階です。

もしも市民会議というものが、常にあれば、あり方としてこれは市民会議っていうのは「第何回市民会議の会合を開きます」ってそのときだけ集まるっていうものとはちょっと違ったものになってこないといけないですね。

どうですか、その組織のあり方の話にちょっと飛びますけど。

(三木)

第何回会議みたいな形で、年に定例的にやる必要もあると思うのです。実際、合意形成をしてビジョンを決めていくっていうふうになると、会議を開かないとできないので。ただそのときだけ皆が集まっていればいいかっていうと、それだと多分地域のことって、実効性のある形で決まっていけないと思うのです。

そうすると市民会議というものの中に参加している、あるいは半分入っているというような人たちが、日常的に意見のやりとりするような、なんていうのか。最近、流行りの言葉で言ったらプラットフォームのような。そういうイメージなのかなとは思いますが。

ただそれをどうやってやったらいいのかですね。

(香山)

プラットフォーム、流行ですけどプラットフォームを運営する人もいなきゃいけないですよ。

日常的に、これを行政が担うのか、それともそれはそれで市民が担うのか。

市民といっても、この市民会議みたいな緩いものではなくて常設の市民団体、あるいはもう一つのちゃんとした法人としてのNPOであるとか、そういうものがあって、プラットフォームを提供して、常に、いつでもそこにアクセスできるものがあるのかって、そんな話にもなってくるのですが、そういうものもまたあるところにはありますよね。

松本みたいな大きな市では、なかなかないのかな。どうなのでしょう。

(小山)

多分一番難しいのが、こういうところを誰が担うかがみんな難しく、じゃあ、と言って消去法で行政が引き受けているということが多かったのではないかなと思うのです。

その場合に、行政の一番のデメリットとして、仕方なく俺がやるよ、という人たちもどちらかといったらかなり消極的にこのプラットフォームを担わなければならないとなると、業務の中として非常に厳しい業務になるので継続しにくいのではないかなと。

これにやりがいを持っている人たちをどう作るかっていうのは、多分今回の話の中でそこまでは難しいのではないかなと思うのです。そうすると、日常的なやりとりにするよりは定例的な会議と会議の間に今回私達が行ったように、その間自分たちで頑張っどっかとマッチング繋いでねというやり方しか現実には難しい、無理ではなからうか。

例えばこういうところに先ほど話題に出た入山辺の地域おこしを考えておられる方が1人入ってきたら、入山辺の話はあの方が常にアンテナ出して、こことここを繋ぐよとなったり、先ほど話題に出てきた地産地消の家作りなんかをやっている方が市民会議のメンバーであれば、そっちの話はここでやろうよとなるのではないかな。

今回私達4人も、それぞれに立場が違いますから、それぞれの立場で、ああしてみようよ、こうしてみようよ、っていうのはお互いが出てきていて、それがこういう会議の場の中でじゃあどうしようかっていう議論になってくる。

ですから毎回の会議を経るごとにこの人たちが受身ではなくて、自らが出ていく立場だから、ここの参加者の立ち位置が、「ご意見いただきます」、「なんかありませんか」、「特にございません」、という立場ではなくするっていう方が、このプラットフォームをわざわざここにもう1個つくるよりは、これらの人たちの重み付けの変え方で何とかならないかなと、その方がみんなの負担は若干増えるのだけれど、誰かを重くさせてしまうという不幸は、ないのではないかなと思うのですけれども。

理想的にはそれが何かいいプラットフォームになって、ここに常に集約されればいいのですけれど。もしかしたら僕らこの今の4人がそうなのですが、このプラットフォームって、もしかしたらデジタルの世界でいいのではないかなと。

今、ネットワーク上の掲示板なりネットワーク上の何らかのコンテンツがプラットフォームであって、そこに何か書けるようにみんなで頑張っていこうよっていう式でいいのではないかという気はしますけどね。必要だと思います。

(香山)

とりあえず低コストで、すぐにでも始められる。まさにこの4人が試行錯誤しながらやっていって、これから先のその文章、ドキュメントを作るスタイルとしても1カ所に原稿を集めて編集するというのではなくて、同時に文章作っていくようなそんなやり方を今年は考えているところです。

市民会議の話ばかりしているのですが、どうしてもそれとは別にプラットフォームというか、言ってみれば行政の役割という部分というのが必要だと、それで去年の提言の中の4章で「人材と組織」って言葉を使ってあり、これは書いてある順を逆にひっくり返してあるのです。

最初の方に専門家の配置育成が必要だというふうに書いてあり、この話はおそらく今回の実行会議の中ではしてないことです。でもやっぱり必要だよねと、いう話になると思うのです。

それをこの実行会議の中の去年の提言で、すでに言っているので同じ言葉で言ってもしょうがないのですけど。何かそういう要素も加えていく必要があるのかなと、気はしているのですが。

その専門家って、提言の中でもフォレスターと書いてしまったのですが、それはそれで一つの目指すべきものだろうけれども、どんな形で現にいる専門家、いわゆるフォレスターはいないので、ここには現にいるいろんな形の専門家というのがいて、もちろん行政の中にもそういう専門家というのがいて、あるいはその市の中にも、住民というのではなくて少し広く考えれば、林業や木材産業に関わるいろんなものがあるわけですからそういうものを一つの専門的な。

でも常設となると行政になきゃいけないのかもしれないのですけど、今の市民のこういうプラットフォーム的なやりとりとは別に、専門の人たちのやりとりを作っていくっていう部分も必要なのだろうなっていう気はしていて、そのコーディネートはやっぱり行政じゃないですかね。

(小山)

行政にいる立場なのでそういう面で、行政だよねって言いつつ言いづらいところがありまして、正直なことを言うと行政がそういうことを担うべきだよねっていう部分と、確実に行政でやれるようにしていく部分っていうもの間に若干の乖離があってそこは大変だろうなと。

フォレスターというものに関して言えば、ここの山は私が面倒見ますよ。ちょっと香山さんから言われて、私そこさっき補足したのですけど森林管理全体を統括するっていう言い方をしたのですけど、この山の面倒見るよっていう山守り型フォレスターってそういう意味ですね。

だから松本市の山は全部俺が見られるぜ、というレベルの人がいるのがフォレスターだとすると、行政の専門職って何ができるのかなって言えば、例えば行政全体の組織や仕組

みと皆さんとを繋げられることができる専門職なのか、市民と行政の基本的な政策を繋ぐことができる専門職なのか、これは多分2者いるのではないかと思います。

今までどちらかといったら松本市の森林を全部見られるよねっていう森林側に寄った専門職の人っていうのは、松本市でも林業の関係の方が採用になってずっと座っていることが多いですし、県ではやはり林業職がいるからいいのですけれども、そこと市民を繋ぐという意味での専門職というのは、今までの行政という組織ではあまり得意ではなかったのではなかろうか。

今現在、こういう問題になってくると、何らかの組織から出てきた意見と、松本市の森を繋ぐという方はある程度必要かもしれない。

その森を見られるというフォレスターはいないけど、これは考えていかなきゃいけない。

それはここの行政の人たちもよくわかるのだけれども、ここでの専門職っていうのは非常に今までの行政組織の中で欠けているので、これってボトルネックだよ。

しかもそれっていろんな業界の中では比較的評価の低いポジションになっているので、ここの皆さんをどう作っていくかっていうのを今の行政に委ねてしまうと、行政の皆さんがすごく辛くならないかなと。ものすごくしんどいことになってしまうっていうのをちょっと危惧しています。

(香山)

まさに、だからそこが市民側からアプローチできるところで、これも去年の専門家の会議の中でいろんなところに散りばめられてある要素なのだが、いかに政策に市民が参加していくのか。

例えば、この会議の進め方もそうですけど行政の原案があってそれについて議論しましょう、ではなくて、まさにゼロベースでこうやって議論してたたき上げていって、だからたった5回の会議では全然足りないという話にもなっている。例えばこの市民会議とか森林の政策と市民を繋いでいく、そのコーディネーター役というのは、現実の問題としては市民側からじゃないと作れないと思うんです。

長期的にはそういうものも含めたのが行政のあり方かもしれないけど、今すぐできるとしたら、それをやって良い事例もあるじゃないですか。伊那市あたり。

その辺、渡辺さんは結構近いと思うのですがどうですか。

(渡辺)

伊那市の方ではフォレストカレッジっていう市民の方と、行政の方で森林のことについて学ぶ機会だったりとか、講座を受講するものがあります。

私も第一期生と今、聴講生として関わっているんですが、行政の関わり方と、市民ないし県内外の方の関わり方のバランスがすごくいいなって思っている。

それって何でいいのかなっていうのは、行政側はもちろん得意なところと不得意な部分があるかと思うんですけども、関わりすぎてしまうとやっぱり先ほど香山さんがおっしゃっていた「形を作って下におろす」みたいになってしまうんです。

フォレストカレッジはそうではなくて、参加者の皆さんがその講座を聞いてどう思ったとか、何か自分事としてできることって何だろうとか、大きい部分っていうよりかは小さ

いスマールの部分で自分たちができることってなんだろうねって自発的に発言できたりだとか、その発言したことに対して、実行するためにはどうしたらいいんだろうかっていうところで、サポートが必要であれば行政が必要な情報を提供したりだとか、関わっていく。

そのバランスがすごく上手というか、うまくやっているなっていうときがありまして、松本市でも同じとはいわないですけども、バランスですね。

ちょっとそこが難しいところなんですけれど、行政の方も関わりつつ、でも市民の声を届けられないと、やっぱり市民の方も何かやらされてる感だと消極的になってしまうので、市民の方が自発的にこういうことをやりたい、そうしようね、そうするためにはこういう情報欲しいとか、ここの場所を借りられますよとか、そういったところってやっぱり行政の方だと得意ですよ。

例えばこういう会場を借りたりだとか、うまく言えないんですけども、バランスっていうか、関わり方っていうか。

(香山)

それこそ場所は行政が作っているのかもしれないけれど、運営していく、全体をコーディネートしていくっていうのが市民サイド。

市民サイドといっても、実はまるっきり素人の一般市民ではなくてそれを専門にやっている人、仕事としてやっているっていうそういう立場だとは思いますが、もしかしたらそういうコーディネートしていくってこと自体が仕事として成り立つ可能性があるわけですよ。

その辺今後の課題としてそういうものを作れるような、そういうことを目指していくような、そういう要素は、市民会議の話ではなくて、その人材と組織作りという提言の4章の部分の中に入れてもいいのかな。

去年の中でいうとこれは、行政の専門職としてのフォレスターって言葉までしか入っていないんですけど、そのフォレスターの持っている可能性を広げていく。

例えば市民とのコーディネーターっていうのは、いわゆる森林総合管理士っていうフォレスターではない。

でも、必要な役割でそういうようなものを、今回報告の中に、こんなことはどうですか的なものとして入れていけることだと思いますね。

(小山)

たぶん「まちづくり」だとかそういう計画の時ってそういうことを実際にやってる方がいらっしゃると思うんですよ。

市の方というだけではなくて、まちづくりのそういう総合的なことをずっとやっておられるような、コーディネーターって言い方なのかコンサルティングっていうのか分からないですけども、外からの方と、それからその地域におられる内部の方と、両方のそういうまとめ役というのがいて、そのまとめ役に対して市民が意見を言いやすい環境を作る。

行政は行政として、その中でできること、できないことを、積極的に発言をする。

役所の人も1人の役所の人間として発言をしていくっていう場になる必要があるのかなと。

そうすると、どっちかを役所が担うのではなくて、役所の1人の組織体の人間としての発言という方が、より市民会議らしいのかなと、先ほど言ったその行政の専門職は行政の立場としてできること、できないことをきちんと言う。

森林の立場としてそれは困るねっていうことを言うフォレスターの立場がいる市民としては、うちらはこうして欲しいんだって言う。

もしかしたらそういう現実的ではない要望も含めて上げていく、それらをまとめていく別の人っていうのは、当然松本市の気持ちが分かる人と、もう一方でいえばもしかしたら外にいて、冷徹に「こんなもんお前らどうすんねん」という、もっときつい人がいてもいいかもしれない。というような立場のとこまで、もしかしたらここの中で入れておいた方がいいのかな。

それが現実はどういう人がいますよって話。いなければ、若干先送りかもしれないけれどもそういう人たちがいる組織をつくっていくことが目標ですって言うお話ができそうな気がしますね。

(香山)

それはだからいわゆる今、先に話してきた市民会議とはまたちょっと違った、コーディネート役的なのとかそういうものですよ。

去年の提言の中にそこまでは入ってなかった部分として実際にどういう形にしたら回っていくのかなって考えたときには、本当にいわゆるフォレスターだけでは全然回らない、というのが日本の今の仕組みから言えば、そういうことだと思うので、そういうことなんかも人材と組織に関わる中で、もうちょっとどこまでこの残された期間の中で言葉として表現できるか分からないですけど、そういう組織のあり方っていうんですかね。

ただ単なる役所の中の組織じゃない組織っていうね。まちづくりの組織っていうのかな。そういうものとして入れていけるんじゃないかという気はしています。

結局、森林再生の話っていうのは森林だけの話ではなくて、地域づくりの話になると、それを改めて確認していく。そこが非常に重要でおそらく今回の我々の提言の中のまとめの方に出てくるのか、あるいは最初に書くのか分からないですけど、それなしにして地域の森林の再生なんてことはないの、その中で結局いろんな専門家が動いていくということだと思いますよね。

(三木)

ちょっと話が戻るかもしれないんですけど恒常的な、常設的なプラットフォームみたいなのはなかなか作れないとしても、例えば会議をやります。会議をやったらその中で例えば、松枯れ被害があった森林がその後どういうふう再生していくのか、丸裸のままなのか、何か別の木が生えてきているのかっていうのを見たいよねっていうので、次の会議の時までに見に行きましょうよと。

それから、例えば隣の塩尻とかでこんな面白い取り組みやっていますよって言ったら、じゃあそれをちょっとみんなで見に行きましょうかっていうふうな時に、それをうまく、それだったらあそこ行けばいいよとかですね。そういうことをやってくれる人っていうのが必要ではないかと。

定例の会議と会議の間に、市民会議に参加している人たちが、自発的にそれを実際見に

行って自分たちが学ぶというふうなことができれば、なかなか面白いことができるんじゃないかなと思うんですけどね。

そういうコーディネーターっていうのは必要ですよ。

どうやったらできるのかはちょっとわかりませんが。

(香山)

どうやったらできるのかはともかく、そういうものがなくてそれを担う人が必要だっていうことはあると思います。

結局、人なのでそこで人が動かなければ、誰かやりましょうっていうとなかなか難しい。

例えばこの4人の会議を回すにしても、今日私がこうやって進行役やっていますけど時々役割を変えつつ、会議と会議の間のコミュニケーションでもやっている。

たまたま私がぱつと言うときもあれば、小山さんが何か言うこともあればという、そんなパターンが多いですけど、そういう点で言うと常にその自発的に動くっていう人がいて、ただ、それがフラットにみんなが自発的ってわけにはいかなくて、やはり一番旗振る人っていうのが必要なんでしょうね。

それを日常のいろんな業務の中で、片手間でどこまでできるのか、もっと普段の仕事がそもそもそこに近い必要があるのかって、いうそんな感じもまたしてきちゃいますけど。

一応今日の会議事項の中でも既に来年度の課題の部分にどんどん突っ込んでいるところですが、この実行会議の報告書というのがある。

そしていよいよ市民会議が立ち上がっていくっていうのが、来年度のタイミング。

完成形じゃなくても市民会議はもう立ち上がってしまった方がいいんじゃないかって私はちょっと思っている。

出来上がった市民会議として動くのではなくて、市民会議を作りながら動いていく。

そんなものでもいいのではないかなというふうにちょっと思っていて、そういうものが果たしてその行政のシステム的に可能なのかどうかっていう。

これはまた、こちらの課題ではあるんですけど、例えばメンバーが固定しないかもしれないじゃないですか。

今のところ、このメンバー固定でやってくってことは、つまりお金の問題があって謝金とかね。

こういう形で予算組みますよってやるんですけど、来年の場合は動きながらやっていくから途中から新しい人が入るかもしれないとか、そんなことを事前に話しながら、そういう組織立てというのが、行政的に可能なのかと、これも面白い課題だと思いますけれども。

そんな形で来年度なんですけど、今年まだ完成しないのに今からこんなことを言わなきゃいけないから言うわけですけど、この実行会議のようなもののあり方というのは、どうしても必要になってくるんじゃないかな。

(小山)

どうなんだろうね。今香山さんのお話を聞いてる中で、今までのキーワードになってきたのが自発的に動く人たちが市民会議の中で中心的にいて、もう一つ面白かったのは

「それが全員じゃなくていいよね」というキーワードがすごく大きいのかなと。

全員が自発的に動く必要はないけれども、この市民会議に行くことによって自発的に動く人がいて、その人たちが学び合いながらの何かの話をすることによってここを作っていきますよってということだとすると、ここでやらなきゃいけないのは自発的に動く核になるメンバーがいて、そこに関わる人たちが、興味を持っている人たちだけに今回なるかもしれないけど、興味を持ってる人たちの知る場を作って同じ戦いをして議論をしていく中で、何か作っていきますよというふうに進んでいく。

そうすると、この動きのこのフォーメーションが面白いよねっていう興味を持って来ている人たちに対して、この中から次のアプローチを1本考えるというやり方がいいのかなと。

そうしてくると、ここに关わるメンバーは、今香山さんが、固定じゃなくて大変かもしれないねって言っていたんだけど、ある程度中心になるメンバーは必要なんじゃないかな。

そこに関して言えばもしかしたらその中で謝金を支払う人という言い方がいいのかどうかかわからないけども、コアメンバーみたいな組織がいて、そこに关わるいろんな方達がいるとすれば、そのメンバーを例えば毎回ゲストスピーカーになるのか。

ただ参加してくれるだけだからっていう、今回はこちらにいて傍聴者っていう対岸の方になっているけれども、これを逆にフラットにしてしまう市民会議でもいいんじゃないかな。

ある程度のメンバーで絶対来て欲しい人たちに関しては、来るけれどもそれ以外の人たちも交えて車座になれる状態を作る。

車座になってきてくれた人たちと一緒に学び合っていく。

その成果をまたここにフィードバックしてくるっていうのであれば、ある程度車座になるときの企画責任者みたいなところは市できちんと任命する。それ以外の人たちはある程度ここだけで来てもいいのかな。というふうになるともう少し役所的に動きやすくなるんではなかろうか。

この中で、何をやっていったらいいんだ、こういうのをやらなきゃいけない、こういう出口にするには、何を考えていって、結局は地域づくりだよな。

その先には、市でやっているいろんな政策に動かしていかなきゃいけないので、かなりいろんなことを考えなきゃいけないよね。

面白そうだね。そこまで考えられるなら面白そうだねっていう人たちをどう呼び込むか、その仕掛けも作っていくっていう。

ここになってしまうとめちゃくちゃ重たいんですけど、そのためにこれを動かすための実行会議をこっちに置くってなると、変な屋上屋になりませんっていう気がしましたので。

(香山)

実際は、今年の実行会議も当初の構想としてはゲストを呼べることになっていたんですね。

なかなかそういうタイミングがなくて、ゲストに来ていただいたことないんですがあと1回残っています。

これで残り30分ほどになったので第5回実行会議、もうこの流れで言うと実行会議っていうこの集まった会議と実際のその報告書を作っていくっていう作業も別れてきてしまう。

もうしょうがないですね。

それはそれでだから我々自腹切ってやるんだけど、でも実行会議としてこうやって場所を設定していただいてのオープンな会議っていうのは、もうあと1回なので、これはぜひゲストとの対話というか。そういうのができる形で組んでいったらいいんじゃないかっていう気が非常にしてるんですが。

これで今年最後の第5回実行会議の在り方をどうしたらいいかっていう話にちょっと移っていきたいと思います。

スケジュールが決まってまして、ちょっと間が空くんですね。

2月20日というはまだ十分寒い時期ではあるんですが、だからちょっと外でやるのは無理かなと思いますが、どんなあり方がいいなってイメージがありますか。

ずっと市役所の会議室は嫌だって言い続けて、ようやくここまで降りてこれなんですがその延長として、渡辺さんなんかどんなイメージをお持ちですか。

(渡辺)

2月寒い時期で外が難しいのであれば、これはまだ提案ベースではあるんですけど、私がイメージしているのは、先ほど自分も飲食店回ったってお話をしました。

木に興味があるとか、興味があるっていうまではいかないけど、木材利用していたり、経木を使っていたりっていうお店の方々や、その地域の中の中心人物っていうかキーパーソンの方に声をかけてそれぞれで、どういう形かはちょっと難しいですけど。

今回の会議もYoutube生配信しているので、その松本市内のいろんなところでみんなが見合うような場所があったらすごく面白いんじゃないかなとか。

あとは今日、野外ですけど、松本の中町の方でイベントがあったりするので、イベントをやっているところと掛け合わせて、人が集まるところでYoutube配信をしたりとか、1カ所っていうイメージでなくて、いろんな方が関わられるような形でできたらいいなって考えています。

あとは私のその知り合いの飲食店さんのところでは、カフェスペースもあるので、ここを利用していいよっていう声も聞くので、松本市内の飲食店のカフェエリアでYoutube配信を繋げて、リアルタイムで例えばお客さんとして来ている方にコメントをいただいたりとか。

私達が一方的に話すっていうのではなく、意見を交えられるような形が、面白いんじゃないかなって思いますね。

(香山)

広い会場でイベント的なものとして開催してっていうのが、なかなかまだこの2月という時点では難しいかもしれないです。

去年は四賀で本当に大きな会場で、100人以上の方が集まってそうしたイベントもやりましたけれども、そうしたイベントの場合だと、そうは言っても限られてしまうから。

まさに今のテクノロジーを駆使して、多元的なイベント。

そうなる、それこそネットワーク上のプラットフォームとしてはYoutube じゃなくなる可能性ありますよね。

Z o o mみたいな多元会議ができるってそういうものになるかもしれないけど、その辺まだちょっとあの研究する時間もあると思うので、そんなような要素を取り入れつつ、ただ場所についてもこういう場所にもうちょっと、ここだって2階っていうね。通りかかる人は絶対にいないところ。

でも通りかかる人もいるような、そういうロケーションを考えながらということができれば、非常に面白くなってくるのかな。

せっかくなんで今年の実行会議についても、最後にはちょっとそういう要素を取り入れていきたい。

会議の中で議論したその議事録をまとめたものっていう、それはそれなりにできてしまうんだけど、そうではなくてこういうことをやっているっていうこと自体を発信する発信の仕方としてね。

最後にもう一工夫したいなって気は非常にするところで、既にちょっと前から事務局の方とも相談してどんなことならできるんだろうねっていうそんなことを、その一つの部分として今日初めて市役所からここに出てこれたんですけど。

(小山)

一方で今みたいなネットワークを駆使してやっていくっていう方法以外に、すごく古典的な方法から言えば、今日出てきた一番外側のような話題を逆に提供いただきながらっていうやり方もあるのかなと。

今まで僕らに近いメンバーでずっとやっていて、自分たちの中でこういうことやってるよねって、ある種この辺って復習に近いのかなと思うんですけど、今日出てきて、市のマスタープランとかこういうところまでいろいろ話はできてるけれども、今回出てきたような例えば家作りとか、こっち側の関係と僕らを繋ぐにはこっち側の関係で何かやっておられる方との意見交換っていう形でゲストをお呼びしてもいいでしょうし、三木さんの方から出てきた入山辺やるじゃん会じゃないけれども、地域づくりの文脈の中と僕らってどう繋がられるんだろうか。

それから市民活動ですとか。

前回ちょっと話題になりましたけど、今回あんまり話題になっていない森林内の新しい利活用みたいなところとどう組んでいくか、こういう方たちに関してはもしかしたらお呼びして、強引に4人が8人になって、これを考えていく上では一番大事な側面でもあるので僕らの世界から少し離れているけれども、渡辺さんの言葉で言えばもしかしたら繋がるかもしれない人たちっていうふうになるかもしれないけども。

そういう人たちをピックアップしてどなたかお呼びして、その方を1人ですと単に1対4で、被告人面接みたいになっちゃいけませんので、そうではなくて複数名お呼びしながらディスカッションができるところ。

それが次の例えば市民会議で今考えている、新しい興味を持つにはどうしたらいいだろう。知る場を作るにはどうしたらいいだろう。自分たちがどうやって学び合えばいいだろう。というところが市民会議の中で考えていかなきゃいけないことだとすれば、そのキックオフ会議として第5回を持っていくというのももう一方であっていいのかな。

それがWebでできるのかこういうふうに対面型でやった方がいいのか。

そこは少し事務局と香山座長さんの方で詰めていただきたいんですが、そっちのあり方もいいのかなっていう気はいたします。

(香山)

ここにあと4人ぐらい来ていただいてっていう。

その方が実現性としては高いと思いますね。

もちろん多角的な参加って、これは技術的に可能ではあるけれども、それを実際にオペレーションすることができるかっていうことになるのと私もあまり経験がなくて、よそでやっているのは知っているんですけど。

それが果たしてこの2カ月程度の期間しかない中で間に合うかどうかですが、そういう点でも初めて複数のゲストを招いての討論会にしてしまう。

でも課題ははっきりしていますから、来年のその市民会議をどうやって作っていくのか。

松本の森林再生というのをそれぞれの中からどうやって考えていくのかというそういうテーマで、それを今から投げかけておいて、ぜひ来てくださって声をかける。

ぜひ来てほしいなって思う人は、それぞれいるんじゃないかと思うので、そんなあり方でやってくると、かなり面白いものになるのかなって気がしますね。

通常ルールでいうと、もう最終的な報告のドキュメントについて、みんなでそれを見て議論する会ということにもなるので、そこに向けて最終には多分ならないかもしれないせっかくそういう会をやるので、その意見を入れた形でまた書き換えられるかもしれないけど。

でも、とりあえずみんなで読めるテキストぐらいなものはその時までにはできていて、それが一応仮の形だけど、この第5回会議にみんなで読むテキストとしてこの会場にいない人達にも既に公開されて、それをみんなで読みながら議論する会っていう仕立てができればすごく面白いですね。

その結果を最終的に受けて、今年度の森林再生実行会議の報告になっていくイメージを今ちょっと思っているところです。

(三木)

そういうスケジュール感というのはだいたい納得しました。開催方法もあらかじめこっちで、ゲストは何人か決めてお呼びした方がいい。

どうしても今は、オミクロン株の市中感染とかいろいろあって、2月20日にどういうふうな形態で開けるのかってなかなか見通すことができないので、少なくとも現状でもこういうことができているわけだから、これでなんとか開催するって、やった方がいいかなと。

それでいろいろ楽しいことはまた来年度、例えば事業を継続するようでしたらそこで考えた方がいいかなと思います。

もうちょっと暖かいときを考えた方がいいですね。

(香山)

ありがとうございます。だいぶイメージが、何とかどうやったら街に出られるのかなってこの会議自体の課題でもあったので、そういう仕掛けをちょっと工夫してみたい。

ただ物理的な会場ということになるといろいろ制約もあるみたいなので、場所はあるんですけど予算上の問題とか、そういうこともあって本当は市役所の1階に、オープンスペースみたいのがあったらすごく楽しいんですけど、そういう庁舎じゃないので、ぜひ次の庁舎はそういうものにして欲しいです。

そんなようなことも含めて次に向けた発信になっていく場作りとして、第5回会議っていうのを位置づけてしまおうかなという。そんな感じですけども、それが実行体制作りの一つのキックオフになっていく。

そういう点で言うと去年の専門家の会議は、完全に時間オーバーしてしまって全部の会議が終わった後に、ネットワーク上のやりとりだけで文書を集めて延長戦みたいな形でやって、何とかギリギリのところに最終の文書を仕上げたんですけども、次回の第5回会議のときにとりあえず我々の中で作ってきた、たたき台というのが何とかできているようにしたいので、2カ月っていう時間が一応ありますが、2カ月あるなんて思っているとあっという間に時間がなくなっちゃいます。

そのときに、そのちょっと前までにみんなで共有できるような、一応今回の報告というそういうドキュメントができているというスケジュール感ですかね。

何とか第5回の会議での討論を踏まえた最終のものっていうのが、3月の頭にはまとまってくるんじゃないかということになるので、何かできそうな感じするじゃないですか。ちょっと安心ですよ。去年に比べるとね。

去年はこの段階でまだどうなるんだろうって全然わかんなかったの。

(小山)

正直なことを言えば、会場はここでもいいかなと思っています。

それほど無理もないですし、逆に言えば、そんなに入りにくい会場でもない。

今回は、入り口のところにどうぞお越しくささいって札を出していただけたので、そういう面では、来られる方云々っていうこと以上に、ここでもいいのかなという気はしています。

少なくとも守衛さんがいるところよりはいいと思いますので、こういう会場を使ってみましょう。

これは逆に言うと、次の例えば市民会議を起こしていくときも、ここを使おうねっていう拠点にしてもいいかもしれないです。

ここも部屋の規模からしますとそんなに小さくもないですし、頃合いもいいのかなと思います。

あと例えば、次の森林会議で何人集めるかわかりませんが、ある程度はここをベースにして、もっといっぱいの人を呼びたいときには対岸の講堂も使うとかですね。

そういった工夫で回せるんじゃないかなということで、僕はここでいいじゃないかと気がいたします。

(香山)

いいですね。

文化財の中でこういう会議をやるっていうのはね。

もちろん木造だし、そういう点で言うと一つの発信力としてね。

こういうところでやっているんだっていうことは、市役所の会議室に比べればすごくイメージ的にもいいし。

ここなら多分、会場を確保しやすいと思うので、その上でどんなスタイルということについてあと10分ぐらいしかないんですけども、何か提案ありますか。

ちょっとこれ以前にも平行になっちゃいますが、文書作りについての話は今ここでしてもしようがないので、これまた終わった後にネットワーク上でやるということになるのは仕方がないんですけど、具体的にその会の進め方とか、その会の広報の仕方とか。

(小山)

もうあれですね。こっちに首を絞めるようにするのであれば、テキストはだいたいできていますよ。

事前にテキストを見せておいて、意見が言えるようにしましょうっていうのと、それから何らかのゲストから逆に言うところについてどうやって、やったらいいでしょう。

この会議を組んでいく部分で、「今年の報告書ってこういうことを考えています。」その中での肝になってくるのが「来年の会議をこういうふう考えることです。」なのでっていうところまでがイントロで入っていて、それに対してそういう活動をしている人たちから見て、こういうものってどう思いますかっていう雑駁な意見をもらっておいてのディスカッションなのかなと。そのスタイルが一番シンプルかなと。

その途中途中として香山さんの方でうまくフロアと繋ぐ、もしくはネットワークの先と繋ぐということができるようになれば、このときのゴールっていうのは、私達のドラフトに対して、たたき台に対して、いただいたいろんな意見をあとは僕らがきちんと反映をするっていう作業だと思うんですね。ですので、いただいた意見をその場で全否定するとかではなくて、いただいて意見は全部肯定しながらどう組み込んでいくかっていうことになってくるのかな。

それは言われた文字通りに入れるってことではなくて、そういうものをどういうふうに反映させてこの会議を組んでいくのか。

これは例えば長期的にはやりたいけれども、短期的に難しいので今回は反映しませんでしたっていう回答もあるかもしれない。

もしかしたらそれはこの中の小さい部分として読み込んでありますっていう話なのか、より具体的になったときにはこれが活きますねっていう話なのか、出てくる意見によってグレードは違うでしょうけれどもそういう議論なのかなっていう気はしましたけども。

(三木)

開催の方法というか、やる内容はそうなんですけれど、いろんな方から意見をもらうっていうふうに考えると、一般的にプレスリリースみたいな感じで何月何日にやりますよっていうだけでは多分駄目で、意見をもらいたい人にちゃんと案内を送って、その人に確実

に来ていただくっていうふうなことをしないといけない。

そう考えると、来ていただきたい、ぜひ意見をまずはいただきたいっていう人の日程をすでに確保しておかないと、この日にやりますから来てくださっていうふうに、これはかなり早い段階で言っていけないといけないと思います。

(香山)

それはもうこの後すぐにみたいな感じですけど、ただもうちょっと考えるのは、広く一般市民から見て、少なくともちょっと関心を持っている一般市民という感じになるかもしれないですけど、見に行きたいかなと会場まで足を運ぶ、あるいはネット上でアクセスしてみたいなっていう、そういう感じにまでまだ十分になってないような気がするんですけど、どんな感じにしたらその辺がもっと開かれたものになるのかな。というところを、例えば渡辺さんはどんなイメージで思いますか。どんな感じにしたら来やすいんだろう。

(渡辺)

来やすいって部分で言うと、まず今回の会議の話自体が、漢字ですごく堅いような、森林再生実行委員、この会議の中で言うと初めて見た人からすると何か参加していいのかなみたいな、ちょっと入りづらいなみたいな部分もあると思うんですよね。

今日も会場の入り口に、ぜひお立ち寄りくださいみたいなご案内があるかと思いますが、そもそも何の会議かわからないものに対して、通りがかった人が、入ってみようかなっていうのはなかなかハードルが高いので、市民の方に知っていただく部分ではSNSも、もちろん今現在、Facebookの方で活用していますが、それだけではなくて興味ある人、ないしはお店とか最初の方にはあったんですけど、図書館とかに、案内を置いていただくとか両方のアプローチが必要かなとも思います。

(香山)

これもね、予算もないのにやるんですけど、三木さんものぼり旗を作ったじゃないですか。

あんなようなノリで、第5回の会議に関しては、もう会議ではなくてね、一つのイベントなんだっていうイメージで、なにかしらのメディアを作って、それはSNSだけではなくて、もしかしたら印刷したものもあるかもしれないし、まだまだそういう点で言うと表現力が弱い部分があるので、そこはちょっと工夫していくってことでしょうかね。

去年の四賀でのイベントはそういう点で言うともものすごいインパクトあったんですよ。やっぱり四賀の人にとって、なんだか知らないけども松本市としてね、空中散布問題から始まった松枯れのことについて専門家が来て話をしてくれるんだって、もうそれだけすごいインパクトで、地元の四賀の方だけではなくて結構、松本の広い範囲からあるいは市外の方も含めて大勢の人が集まって、実際かなりホットな、ちょっとホットになりすぎるぐらいの議論があった、そういう場だったんですね。

それに比べると、今年の会議はもう極めて地味で、やっぱりマツが目の前で枯れてくってことのインパクトは強烈でしたね。その後どういうふうに考えるっていうあれほどのことには、なかなかないかもしれないけど。でも今までずっと関わってきた、だから言い換えると、去年の四賀のイベントは平均年齢すごく高かったです参加者は。つまり、昔から

マツに関わって郷土の森林に思いのある方たちが多かったから。でも、今度のイベントに関して言うと、むしろ少人数でも若い人がいっぱい来るような形で出来たらいいと思いますね。

(三木)

先ほど、おっしゃったように、名前って結構大切だと思っていてですね、会議と言われて行きたくなる人はあんまり世の中にいないんじゃないかという感じがしますので、会議は会議として名前ではあるけれども、もう少しね、その催しの名前っていうのを、こういうふうな趣旨なんだっていうふうなことが分かるようなものがあるといいなと思いますね。

やっぱりそれがないと、第5回松本市森林再生実行会議ではなかなか人が来ないですね。

(香山)

これは公式タイトルで、でも呼び掛けるためのタイトルは、去年もたしか四賀のはなんとかフォーラムとかって名前ついてましたよね。そういう点では別タイトルもつけつつやっていく、特に本当私思うのはこれから先のことなので、比較的若い世代が来れるような雰囲気っていうんですかね。それができたらなと思います。

では、一応15時半までの中であと5分というところでだいたい第5回実行会議についてというところまでほぼ終わったんですが、その他のことで今日皆さんの方から何か持ってきていることとか、話題提供とかありますでしょうか。

(三木)

その他じゃないんですけど、ホワイトボードを今見てて、気づいたというか、思ったことがありまして発言したいんですけど、森林再生市民会議は提言の中ではこの長期ビジョンに対して合意形成をしていくっていうのが、一つ与えられた役割だと思うんですけども、再生市民会議に参加する人の全員が長期ビジョンに関わらなくてもいいんじゃないかと感じは、これで今回の会議を聞いてて思いました。

なんか、マスタープラン決める会議みたいなのに参加したいって人はそうはいないだろうと。市民会議の中でいろいろな松本市の森林のことを知る中で、自分たちの意見をビジョンに決めていきたいという人もいればいいし、そういうことは誰かに任せておいて、市民会議でいろんな人たちと話すことができたので、私は今この話の内容を反映して例えば、森林ボランティアをやりたいとか、そういう形で関わっていくことができてもいいかなと思いますので、それは公的には長期ビジョンの合意形成をやるんだけれども、その中の精神というか、それぞれの心構えってのはもう少し広く取ってもいいかなと思いました。

(香山)

ありがとうございます。そういう、イメージの発信がすごい大事ですよ。でないと、結局、なんとなく行政の会議だって感じになるとやっぱり来る人が限られちゃうし、また発言する方も、うっかりすると組織を背負ってきて自由なこと言えなくなっちゃうって

う感じがすごく出てくると思うので、現実的にどういうメンバーになるかってことの中で、またそれをいろいろ調整されることだと思います。

その辺のある程度ゆるい雰囲気で行政の会議の中でどう実現するかと、これはもう本当に逆に行政側の専門職の工夫ですね。どんなことだったら法的に可能なのか、みたいなそういう話にもなっちゃうんですけど、そんなことを検討できれば非常に面白いんじゃないかと思います。

一つ忘れてました、参考文献を集めるという作業、これも別途最初にお話したところで、今回の報告書の中に最後にダーッと参考文献リストがあるっていう、それでそれは大事な課題だったので、それも忘れずに入れていきたいと思います。そんなことで大丈夫ですかね。

そうすれば今日の会議本体の内容はここまでということにして、今後のことということで事務局の方にお返ししたいと思います。

(事務局)

今日も2時間休憩もなく皆さん熱心にご議論いただきまして、まずはお礼申しあげます。先ほど次回の会議をイベント的に少し皆さん集めてというご提案がありました。なかなかこう提言をまとめるのに皆さんも別の機会ですとやるという御覚悟を決めていただいたので、ぜひそのイベントをですね、何か我々も良いものにしていきたいなと思ったところです。会場についてはここでもいいですし、あと例えばちょっとここは真逆なところなんですけど、サザンガクとか、そういった環境が整ってるところもありますので、またそれを基本にご相談をさせていただきたいと思っております。

それから意見を聞くメンバーがどんな方かということで、市も昨年基本計画の作成に関わっていただいた松本「シンカ」推進会議という会議があります。

これは、例えば観光とか、まちづくり、イベントそれから経済、その各専門の方々がメンバーとしている会議でございまして、その方々が市のシンクタンク的な役割ということもあって、いろんな会議とかにも行って意見を言える立場の方々でもありますので、環境と森林については、原薫さんがメンバーであります。原薫さんってことではなくて他の方々、いろんなそれぞれの専門家の方がいますので声をかけてもいいのかなというのが一つございます。

それからこれも前回の会議でちょっとお話させていただきましたが、アルプス公園の北側ですが、拡張部について来年この会議と近い形で、来年は市民の方に参加していただいて、どんな形で利活用をしていくのかとか、市民の方がどんな形でボランティアに携わっていくのかと、そんなことをちょっと今検討している会議がありますので、そのメンバーの方にもお声がけをするというのも一つかなというふうに思っています。そのような形で次回はぜひそんなイベントとか、ちなみにすいません話が飛びますが、去年は四賀で里山をみんなで考えるフォーラムということでやりました。そのときは行政側で、ブリーフィングという形で、やる前にマスコミの方を集めてこんなイベントこのフォーラムをやるので、ぜひPRお願いしますというようなこともやりましたので、もし機会あればそんな形で、事前に周知もやっていけたらなと思っておりますので、また詳細についてはご相談させていただいてということをお願いしたいと思います。

(事務局)

委員の皆様大変お疲れ様でございました。

以上をもちまして第4回森林再生実行会議を終了いたします。

お疲れさまでした。